

発達障害学生支援のためのアセスメントシステムの検討 - ニーズの把握と鑑別の見立てに着目して -

吉田 ゆり・田山 淳・西郷 達雄・鈴木 保巳

Study of the assessment system for developmental disorders student support

Yuri YOSHIDA Jun TAYAMA Tatuo SAIGO Yasumi SUZUKI

Abstract

We started a special education nine years ago in Japan. In our research, in order to discover the developmental disorders, it was found that the confirmation of mental health is valid. In particular, it is difficult to distinguish between social anxiety disorder. In Students who are at risk of developmental disorders, have anxiety and maladaptive sense of university life. Therefore, the screening, a plurality of test battery is essential.

Key Words: Student, Developmental disorders, support, Assesment,

問 題

近年我が国では、高等教育機関に二万人を越える障害学生が在籍しており合理的配慮が推進され障害学生支援が進みつつある（日本学生支援機構、2016）。高等教育機関における特別支援教育の重要性の高まりは、文科省による障害学生受入促進研究事業や各大学における事例研究をもとに学生支援事業や教員啓発研究として展開されている（国立特別支援教育総合研究所・日本学生支援機構：2013）。障害学生への『合理的配慮』が法的整備・推進がなされる中、発達障害に焦点化した支援は研究の端緒にある。研究の多くが、個の問題に応じた心理臨床的アプローチや、主訴に基づく網羅的な配慮事項のリスト化による支援実践を中心としている。現実的には困り感や不適応感を持ちながら、学業成績（例えばGPA）が振るわない、単位取得が難しいなどから長期履修や退学等に至ることも多いことは臨床的・教育的経験としてよく知られている。特別支援教育の知見に基づく実証的研究による早期支援と、彼らの自己実現を念頭に置いた課題解決的対応が求められることは自明である。

学生相談室による発達障害学生の支援活動は、こうした現状において一定の成果を上げてきた。例えば中島（2003, 2005, 2007, 2013）、山崖（2008）など、多くの学生相談事例が報告されている。西村（2013）は、個々の臨床像が多様で具体的な人物像がつかみにくいなかで、面談に来る発達障害大学生に対応し、目の前の本人の困りごとに対する支援が個別に行われている」（p44）ことを報告している。この数年での障害学生支援室を中心とした支援の充実がめざましい（日本学生機構、2016）。

しかし、こうした障害学生支援体制の一方で、障害学生支援室が学生相談など、早期支

援や合理的配慮の開始につながる窓口にたどり着くためには、自らが支援を必要であるという被援助認知と、援助要請のための行動、あるいは、周囲が本人の特性に気づき被支援を勧める契機、把握契機が重要である。

把握契機とスクリーニング検査

把握契機の課題は多様であるが、そのひとつがスクリーニングを含めたアセスメントである(吉田・田山・西郷・鈴木, 2014)。大学入学までに診断を受け高等学校等での支援を受けた経験のある学生も増加しているが、入学後、何らかの把握契機により支援が開始されることも変わらず多い。我々の先行研究(2014)では、大学における発達障害学生のアセスメントに関わる論文等(15本)は、すべて大学就学前に診断を受けていない、就学後に発達障害の疑いがあるとされた場合のアセスメント研究であった。このことは、発達障害が最初から懸念されるわけではなく、大学生活の不適応感や、社交不安障害・うつ症状などのメンタルヘルスの不調など、あるいは大学生活上での修学のつまずきなどの困り感の顕在化により発達障害のリスクが検討されることが非常に多い状況であることを示している。

大学生の発達障害スクリーニング研究としては、各種スクリーニング検査の信頼性と妥当性の検討(立石・立石・園田, 2012)、自閉症スペクトラム指数日本語版(AQ-J)を用いての調査(北添・藤田・寺田, 2009)、ADHDの困り感尺度(岩淵・高橋, 2011)、ニーズ把握質問紙の開発(高橋, 2012)があげられる。その多くが、単独の標的を絞ったスクリーニング検査の有効性の検討研究である。自己認知困難尺度開発(佐藤・相澤・郷関, 2012)のような関連尺度が検討されることもあるが、発達障害等との関連の検討はなされていない。そもそも最初から単一の標的(障害)を絞ったスクリーニングは大学システムの中で導入が難しいのではないかという懸念もあるだろう。その中で、高橋(2012)は発達障害学生支援に必要なアセスメントとして、「支援ニーズを探るアセスメント」「学生理解のためのアセスメント」のふたつをあげて、段階的に実施する方法を紹介、実践の報告を行っている。支援ニーズとは、大学生活における「困り感」と、それらに関して支援が必要だという認識であるとしている(p127)。高橋らの取り組みにおいて着目すべき点は、スクリーニングの構造化と、「困り感」への焦点化である。障害そのものの傾向を調べるチェックリストを開発し面接を行った結果、特性を持ちながらも個別支援を必要としない、インフォーマルな周囲からのサポートや自らの努力で大学生活を乗り切る学生が多かったことを踏まえ、学生自身が支援と必要とし、困り感があればアプローチするという姿勢である。困り感の把握には、以下の2種類の質問紙を開発、活用している。

スクリーニングに使用する質問紙 UPI, UPI-RS(こころの健康のための資料)保健管理センターや学生相談室が、新入生ガイダンスや健康診断の一環で実施することを念頭に置いて開発し、導入されている。信州大学では、履修登録に用いるオンラインの学生向け情報システムを用いて回答させ、スクリーニングとして導入している。相談希望があると回答した学生及び高得点の学生を面接につなげる方式としている。

「ADHD 困り感質問紙」・「ASD 困り感質問紙」発達障害に関する困難について、UPI-RSと同様のアプローチを行えるような質問紙として、「ADHD 困り感質問紙」「ASD 困り感質問紙」を開発、実践を行っている。

高橋(2012)のような、入学後のオリエンテーションの場を利用し、質問紙のような客

観的ツールを用いたアセスメント研究への期待は大きい。学生自身が感じるメンタルヘルスの不調や何らかの「困り感」が、入学後早期に把握できることで、早期支援の開始が可能となる、このようなアセスメントシステムの研究は端緒にあると考えられる。

目 的

本研究では、大学における発達障害学生（特に自閉スペクトラム症、以下 ASD）の早期支援の実現のためのアセスメントシステム、特にスクリーニングに着目する。要支援学生の把握契機において課題となるものは、非常に近い症状をもつ他障害等との鑑別のむずかしさ（例えば社交不安障害等）、本人の学生生活に関する困り感の有無、修学の達成度（学業成績等）であることから、スクリーニングにおける問題点を整理することを目的とする。

方 法

1. 対象者

A 大学複数学部の1年生241名。筆者らの担当した教養教育及び学部基礎科目を履修した学生に研究趣旨を説明し、同意を得られたもの。

2. 研究期間

20XX年2月。

3. 手続き

研究代表者及び研究分担者が担当する授業科目の修者（研究テーマに関連し、研究の主旨の説明が十分可能な授業科目に限定）に対し、発達障害リスクのスクリーニングを目的とした質問紙調査バッテリー（表1）を配布し、その場で記入してもらい、回収した。

4. テストバッテリーの構成

先行研究に基づき、大学生のメンタルヘルスチェックに使用される質問紙を集め、ASDスクリーニングに関連するものを選定した。

①自閉症スペクトラム指数日本語版（AQ-J）：青年期の ASD リスクを確認する検査（若林・東條・Baron-Cohen・Wheelwright, 2004）。自閉症スペクトラム仮説に基づき、障害に当てはまるかどうか、障害の程度、精密な診断を行うべきかどうかの臨床的スクリーニングに使用できる。カットオフポイントは若林らの先行研究結果通り33点以上とした。

②社交不安障害（SAD）検査（Social Anxiety Disorder Scale）：大学生のメンタルヘルスの不調と社交不安障害の関係はよく知られている（貝谷, 2010）。ASD との鑑別が臨床的

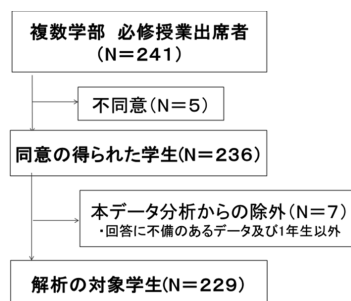


Fig.1 対象者選定の手続き

Table 1. テストバッテリーの内容

社交不安障害検査 (SADS)	貝谷,2009
自閉症スペクトラム指数日本語版(AQ-J)	若林ら,2004
発達障害関連困り感質問紙 (大学生生活に関する困りごと調査) (信州大学版)	高橋ら,2014
CLAS(大学生生活不安尺度)	藤井, 2013
WHO QOL26	WHO, 1997
ストレス状況対処行動尺度 (CISS)	Endler,2012

に指摘される。社交不安障害検査(貝谷, 2009)は、過去一ヶ月の間の対人緊張度とそれによる生活上の障害度を測定することを目的としている。

③発達障害関連困り感質問紙(大学生活に関する困りごと調査)(信州大学版)(以下、困り感質問紙):「学生の得意・不得意の特徴からくる困り感」を評価したり、「大学生活でうまくいっていないと学生が感じている程度」を調べたりする質問紙(高橋;2012, p131)とされている。ASDに焦点を当てたもの、ADHDに焦点を当てたものがそれぞれ作成されている。「学生の得意・不得意の特徴からくる困り感」を評価したり、「大学生活でうまくいっていないと学生が感じている程度」を調べたりする質問紙(p131)とされている。カットオフポイントは設定されておらず、パーセンタイル上位5%を目安に声かけしたり、下位尺度を用いて具体的な困り感を把握できるような構成である。

④CLAS(大学生活不安尺度)(College Life Anxiety Scale):大学生活において顕在的な不安がどの程度存在するかを問う質問紙検査である。日常生活不安(大学の日常生活に対するファン間)、評価不安(大学における単位や試験に対する不安感)、大学不適応感(不登校や中退など就学の問題につながるような大学不適応感)の3つの不安尺度で構成されている(藤井, 2013)。

⑤WHO QOL26(WHO Quality of Life 26):疾病の有無の判定を目的とせず、主観的幸福感、生活の質を測定することを目的とする。身体的領域、心理的領域、社会的関係、環境領域の4領域のQOLを問う項目と、QOL全体を問う項目で構成されている(世界保健機関・精神保健と薬物乱用予防部 編・田崎・中根著, 1997)。

⑥ストレス状況対処行動尺度(CISS):大学生活と限定せず、個人が、ストレス状況下でどのような行動を取りやすいのかを「課題優先対処」「情動優先対処」「回避優先対処」「気分転換」「対人的な気晴らし」の5尺度で把握することを目的としている(Endler・Parker, 2012)。

5. 分析

①～⑥の検査については、回収後、各検査マニュアルに従って得点化した。本稿では、得られたデータを以下のふたつの視点から分析し、研究1・研究2として報告する。

- ・研究1:他の疾患・障害と非常によく似た症状による発達障害リスクの可能性の検討(社交不安障害SADと自閉症スペクトラム障害AQ-Jの鑑別の見立て)
- ・研究2:大学生活への不安や不適応感と発達障害リスクの関連の可能性の検討(CLAS・WHOとAQ-Jの結果の比較)

研究1 社交不安障害と自閉症スペクトラム障害の鑑別の見立て

研究1の目的 ASDは、青年期においては社交不安障害(SAD)との鑑別の難しさが臨床的には指摘されているが、実証研究は見当たらない。研究1では、SADを軸に、自閉症スペクトラム指数(AQ-J)と、社交不安障害検査、発達障害関連困り感質問紙(高橋, 2014)、学業成績(GPA)との関連について検討する。

方法 使用したデータは以下のとおりである。

- ①SAD(SAD得点/カットオフポイントにより重症度で3群に分類)
- ②AQ-J得点(カットオフポイント33点以上であるが、今回は得点を用いた)

Table 2. AQ-J 得点・GPA・SADS 得点・困り感質問紙得点の相関

	SADS	1年前期 GPA	AQ-J 得点	困りごと調査 (ASD)	
				対人的 困り感	自閉的 困り感
1年前期GPA	-0.01				
AQ-J得点	0.43*	-0.03			
大学生生活に関する 困りごと調査 (ASD)	対人的困り感得点	0.52*	0.04	0.60*	
	自閉的困り感得点	0.51*	-0.06	0.58*	0.64*
	困り感項目得点	0.57*	-0.02	0.65*	0.87*

p<0.01

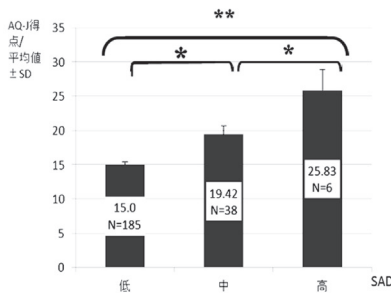


Fig. 2 SADSの重症度群とAQ-J得点
 **P>0.001 *P>0.01

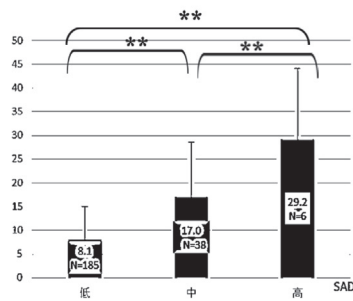
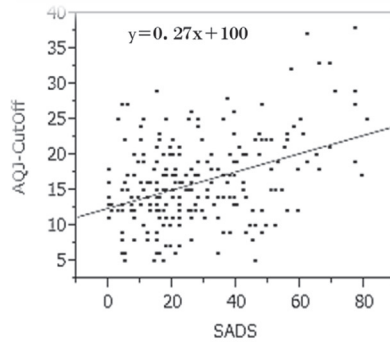
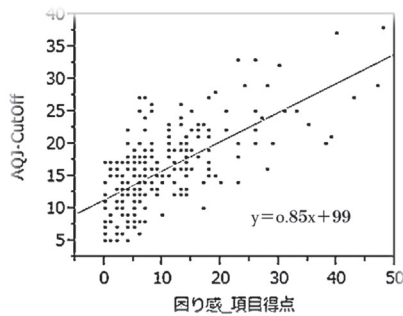


Fig. 3 SADSの重症度群と困り感質問紙得点
 **P>0.001



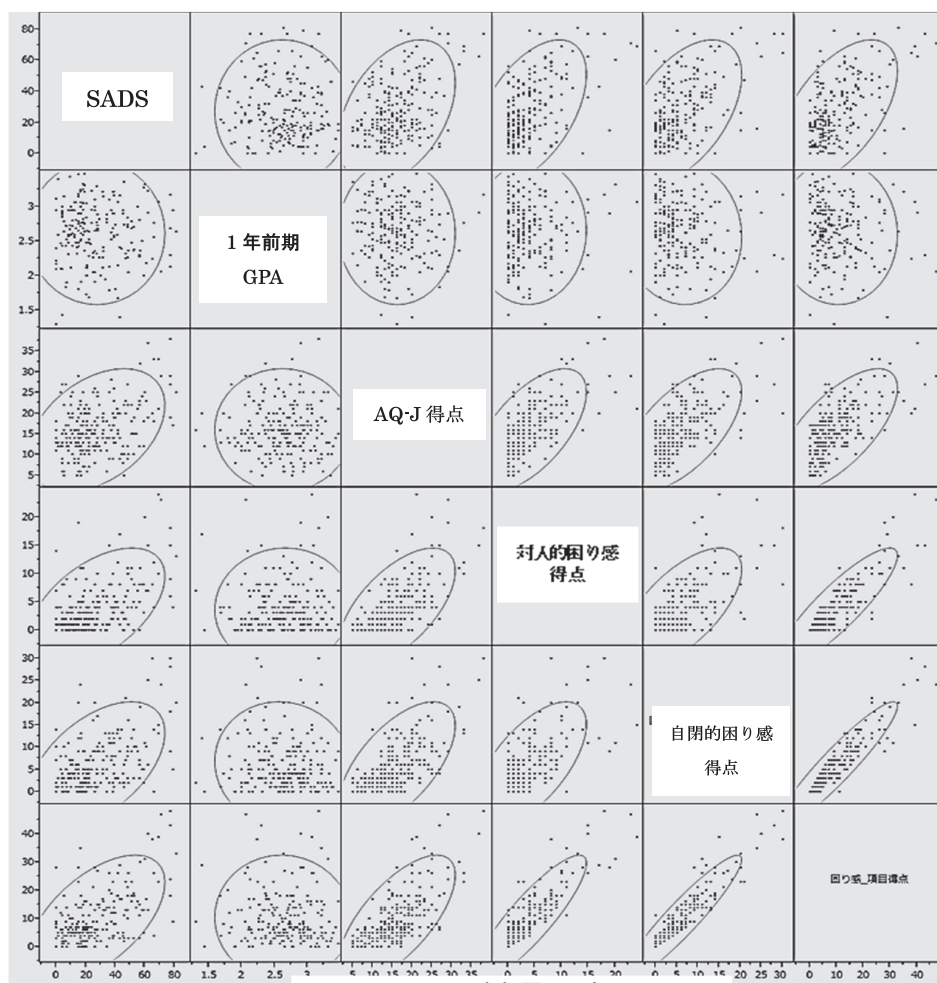


Fig. 4 各相関の分布

③ 困り感質問紙（相関を求めるため該当個数ではなく得点化を行った）

④ 1年前期のGPA得点

まずは、四種類の相関、次いでSADを軸とし、SADの重症度で3群にわけ、各群間に相関があるかどうかを求めた。

結果と考察 SAD得点はAQ-J得点、対人的困り感得点と相関（中程度の相関）がみられた。SADリスク高群は、AQ-Jリスクも高い。よってSADリスクの高い学生は、ASDリスクも高いと言える。SAD得点が高い学生は対人的困り感・自閉的困り感の両方も高く、両者の数値は近い。よって、SADリスクとASDリスクは非常に関連が高く、鑑別の難しさが指摘できる。

これらのことから、SADリスクの高い学生には、ASDが背後にある可能性が指摘でき、SADの可能性の高い学生には、ASDをとらえるテストバッテリーが必要であることがわかった。また、ASDのスクリーニングにおいても、SADをとらえるテストバッテリーが

必要であるといえる。GPAは、SAD及びそれ以外の指標とも関連がみられず、本研究では関連を指摘できなかった。以上より、単一の質問紙ではその背後にある鑑別のしにくい症状のリスクを明らかにすることができず、発達障害のスクリーニングにおいては、テストバッテリーが必須であることが示唆された。

研究2 大学生生活への不安や不適應感と発達障害リスクの関連の可能性の検討（CLAS・WHOとAQ-Jの結果の比較）

研究2の目的 ASDは、大学生生活への不安や不適應感を持つことが多いといわれることから発達障害リスクの関連の可能性を検討する。よって研究2では、自閉症スペクトラム指数（AQ-J）と、CLAS、QOL、困りごと調査の関連について検討する。

方法 ①AQ-J得点（カットオフ得点を参照し3群に分類した）、②CLAS得点、③WHO QOL26得点、④困りごと調査（ASD版）について、AQ-J得点と各検査の相関、次いでASD得点による3群（高中低）の層別化解析（分散分析）を行った。

結果と考察

AQ-J得点とCLAS得点からは、AQ-J得点高群がよりCLAS得点が高かった。よって、ASDリスクの高い学生が大学生生活への不安・不適應感も高いといえる。

AQ-J得点とWHO QOL26得点からは、AQ-J得点高群がよりQOL得点が高い。よって、ASDリスクの高い学生は、大学生生活を含む生活全般への不適應感が高い。

AQ-J得点と困りごと調査では、AQ-J得点高群がより困りごと調査得点が高い。よってASDリスクの高い学生は、大学生生活において困り感を持っていることがわかった。

AQ-J得点と各指標に高い相関及び有意差が見られたことからASDと大学生生活への不安・不適應感は高いことがわかった。よって、困り感の高さはASDのスクリーニングの指標の一つになり得ると言えよう。また、テストバッテリーの構成には不安や不適應感を明らかにする指標が有効であると考えられる。質問紙によるスクリーニングののちに不安や不適應感の自覚や所在を明らかにする面談等を実施することにより、有効な支援へつなげる可能性が示唆された。一方今回はAQ-J得点での比較であり、カットオフによるリスクの高さでは判定していないことなどから、リスク高事例別の検討も課題である。

総合的考察と今後の課題

発達障害（本研究ではASD）リスクの高い学生は、単一の質問紙では把握が難しくSADなどとの鑑別の見立てが必要であるとともに、スクリーニングにおいてはテストバッテリーが必須であることが示された。これらは、質問紙法の限界ともいえ、今後は、面接法を含むアセスメントシステムの検討が必須である。さらにスクリーニング指標としてのGPAの採用には検討が必要であり学業成績のみでの判断には難しい。本調査は第1学年後期であることから、この時期特有の学生の不適應感・支援ニーズの低さも想定でき、今後の課題であるといえる。

本研究は長崎大学医歯薬学総合研究科（医学系）倫理委員会の承認を受けている（承認番号15011657）。

Table 4. AQ-J 得点・CLAS・QOL・困りごと調査の結果

テスト	平均値	標準偏差	下側95% 信頼区間	上側95% 信頼区間
AQ-J得点	16	6.4	15.2	16.8
CLAS	47.7	12.4	46.1	49.3
QOL	3.5	0.5	3.4	3.5
大学生活に関する困りごと調査(ASD)	0.4	0.4	0.4	0.5

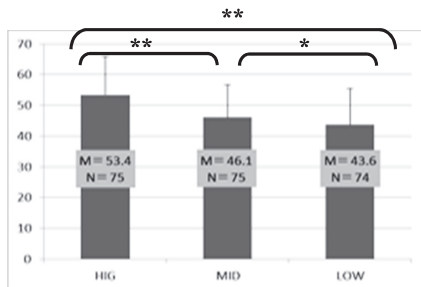


Fig.5 層別化解析 (AQ-J 得点と CLAS 得点)
**P>0.001 *P>0.01

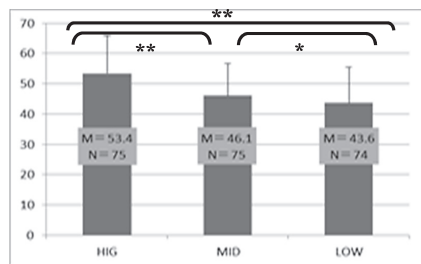


Fig.6 層別化解析 (AQ-J 得点3群と QOL 得点)
**P>0.001 *P>0.01

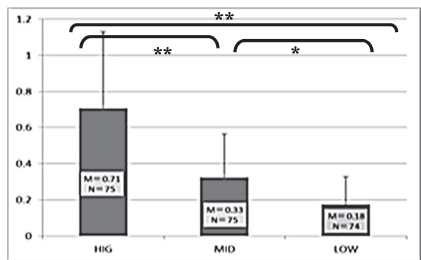


Fig.7 層別化解析 (AQ-J 得点3群と 困り感得点)
**P>0.001 *P>0.01

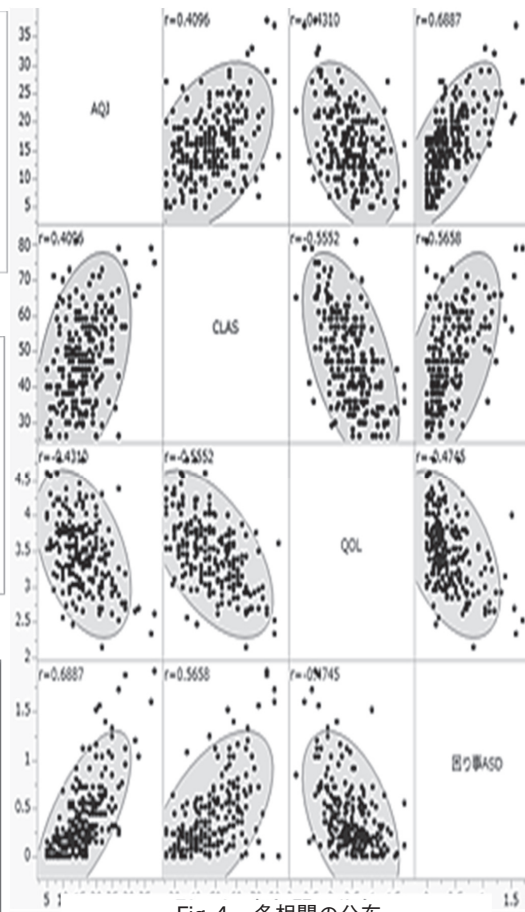


Fig.4 各相関の分布

文 献

- 若林明雄, 東條吉邦, Simon Baron-Cohen, Sally Wheelwright (2004) 自閉症スペクトラム指数 (AQ) 日本語版の標準化－高機能臨床群と健常成人による検討－, 心理学研究, 75, 78-84.
- 日本学生機構 (2016) 平成27年度大学, 短期大学, 及び高等専門学校における障害のある学生の就学支援に関する実態調査の結果の概要について.
http://www.jasso.go.jp/about/information/press/1229854_3557.html (2016/09/28)
- 国立特別支援教育総合研究所・日本学生支援機構 (2013) 高等教育機関における発達障害のある学生に対する支援に関する研究－評価の試みと教職員への啓発－研究報告書.
- 貝谷久宜 (2009) 社交不安障害検査 実施の手引き, 金子書房.
- 藤井義久 (2013) CLAS マニュアル 金子書房.
- Norman S. Endler, James D.A. Parker, 古川壽亮・渡邊一久 訳 (2012) CISS™ 日本語版, 金子書房.
- 立石恵子・立石修康・園田徹 (2012) 保健・福祉系大学生への発達障害スクリーニング検査の信頼性と妥当性の検討, 九州保健福祉大学研究紀要 13, 63-69
- 北添紀子・藤田尚文・寺田信一 (他) (2009) 大学生における自閉症スペクトラムの調査－the Autism-Spectrum Quotient 結果の分析. LD 研究, 18-1, 66-71.
- 高橋知音 (2012) 教職員のための障害学生支援ガイド, 日本学生支援機構, 169-201.